

落花

徳富蘇峰

蝶舞蜂歌 到処宜し

香雲漠漠 草離離

早春何ぞ若晩春好きに

満袖の軽風 花落つるの時

【作者】徳富蘇峰（一八六三〜一九五七年）（文久三年〜昭和三十二年）、明治・大正・昭和時代の評論家。漢詩人。蘆花の兄。名は正敬。

通称猪一郎。号は蘇峰。熊本県水俣出身、熊本洋学校に学び、花岡山の盟約に参加、同志社に学び新島襄から将来の期待をかけられたが、学生運動に巻き込まれ中退。十九歳故郷で私塾大江義塾を創設。明治十九年、民友社創立。国民之友、国民新聞を創刊。山県・桂太郎と結び、貴族院勅選議員となる。桂死後政治から身を引き、著述活動に専念。昭和四年経営不振のため、民友社を退く。皇室中心主義、国家主義思想により満州事変後の戦時体制下の過程で軍部と結び、大日本言論報国会会長。終戦後公職追放を受け、文筆生活に入る。歴史家としての著述もある。文化勲章受章。著書三〇〇余。昭和三十二年病没。享年九十四。

【語釈】*香雲…群がり咲く花の様子。 *猗猗…一面に広がる様。 *離…草の生い茂るさま。

*何ぞ若かん…どうして〜に及ぶだろうか（いや〜及ばない）。 *満袖…袖いっぱい

【通釈】蝶が舞うようにして飛びかい、蜂が歌っているかのように羽音をたてて自由に飛び回っている。行く所何処でもこうした春の風情で

心地よいものである。桜花が雲のように咲き誇り、青葉が勢いよく茂っている。早春の景色は、この晩春の景には及びもつかないだろう。袖いっぱい軽やかに風が吹き抜け、花がハラハラと散る好時節であるよ。